

歴史と文化を 考えよう

文化財保護強調月間はじまる



名所江戸百景「みつまたわかれの洲」(歌川広重画)

※「みつまた」は隅田川にあった洲で、現在の中央区中洲付近。絵は、江東区側から中央区方面を見ている。

下町文化

NO. 263
2013.9.27

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<http://www.city.koto.lg.jp/>

- 文化財保護強調月間
民俗芸能大会
文化財講演会
東京9区文化財古民家めぐり
- 江東区伝統工芸展
- 江東区芭蕉記念館特別展
芭蕉一柿衛文庫の名品ー
- 城東の村を歩く⑤
大島地域の出村
- 東京海洋大学越中島キャンパス
所在の切石について
- 深川江戸資料館企画展・特別展
企画展「江戸の三大改革と松平定信」
特別展「松平定信の生涯とその作品」

見て・聞いて・学んで
文化の秋を楽しもう

もうすぐ10月。暑さも一段落し、ようやく秋本番を感じる気候になりました。秋といえば、読書・スポーツ、文化などよく言いますが、「見て・聞いて・学んで」をテーマに、この季節を過ごしてみたいかがですか。

文化財係では、この時期に合わせて、毎年10～11月初旬を文化財保護強調月間と位置付けています。「下町文化」では、「歴史と文化を考えよう」と銘打って、この期間に実施する江東区の歴史や文化財に関する行事を紹介しています。今年も「文化財講演会」、江戸時代に生まれた「民俗芸能」の公開、職人の技を公開する「伝統工芸展」、「東京9区古民家めぐり」など、盛り沢山です。さらに、芭蕉記念館や深川江戸資料館、中川船番所資料館でも、特別展・企画展が開催されます。

日頃は、あまり関心がないという方も、ぜひこの機会に「文化の世界」に入り込んでみませんか。新しい自分を発見できるかもしれません。

詳しくは、2・3頁をご覧ください。

なお6・7頁は、前号に続き越中島(東京海洋大学内)の幕末の砲台に関する記事ですので一読ください。

民俗芸能大会

10月20日(日)

会場 都立木場公園

【午前11時～12時30分】

場所 木場公園内入口広場

木場の角乗

東京木場角乗保存会

江戸時代、木場の筏師(川並)は、水に浮かんだ材木を鳶口ひとつで筏に組んでいました。角乗は、その仕事の余技として生まれました。

【午後1時～3時50分】

場所 木場公園内ふれあい広場

木場の水遣

木場木遣保存会

木場の川並衆が材木を操る時、お互いの息を合わせるため、詠われた労働歌です。

木場の水遣念仏

木場木遣保存会

木場に伝えられたもので、大数珠を手繰りながら念仏を唱える大変珍しいものです。

砂村囃子

砂村囃子睦会

江戸時代中期に金町の香取明神社(現葛飾区葛西神社)の神官が百姓に教えた祭囃子の流れを汲むお囃子です。

富岡八幡の手古舞

富岡八幡の手古舞保存会

富岡八幡宮の祭礼で神輿の先頭に立ち、木遣りを歌いながら、男鬘に裁着袴という粋ないでたちで練り歩きます。昔は、辰巳芸者が行いました。

深川のか棒

深川力持睦会

江戸時代から倉庫地帯であった佐賀辺りで、米俵や酒樽などの運搬をする人々の余技として芸能化しました。



文化財講演会

「大江戸の生活と

TV・映画の時代考証」

江東区文化財保護審議会委員の北原進先生を講師にお迎えし、17世紀初頭から急速に発展し、世界的大都市になった江戸についてお話いただきます。また、TVでの時代考証の経験なども踏まえ、歴史とフィクションの虚実など、江戸の歴史のみならず、時代劇ファンにとっても興味深い内容になると思います。

日時 10月2日(水)

午後6時30分～8時30分

会場 深川江戸資料館2階小劇場

(江東区白河1・3・28)

定員 200人(先着順)

※入場無料

東京9区文化財 古民家めぐり

都内9区が参加して、古民家を紹介する事業で、昨年に続き10月2日(水)～同30日(水)の期間、東京区政会館(千代田区飯田橋3-5-1)でパネル展示を実施するほか、古民家めぐりも行われ、多彩な内容となっています。江東区にも旧大石家住宅(南砂5-24地先)があります

が、パネル展示や他区の古民家を訪ねるのも一興かと思ひます。



会場 ●都立木場公園(木場4丁目)入口広場・ふれあい広場

交通

- 東京メトロ東西線「木場駅」下車徒歩5分
- 都営地下鉄大江戸線「清澄白河駅」・都営地下鉄新宿線「菊川駅」下車徒歩15分
- 都営バス 葉10【とうきょうスカイツリー駅前～新橋】木場4丁目下車

江東区伝統工芸展

入場無料

日時 11月1日(金)～4日(月・振休) 午前9時30分～午後5時

※最終日は午後4時まで

会場 深川江戸資料館 地階レクホール(江東区白河1-3-28)

本展では、伝統工芸の技を受け継ぐ区無形文化財保持者による実演を行います(日程表参照)。ふだん見ることのない伝統の技をご覧ください。また体験が可能なものもあります。

* * *

伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による工芸品の即売が行われます。またとない機会ですので、是非どうぞ。

技の体験(実費がかかります)

午前10時～正午／午後1時～3時

日程表のうち、 の技術で体験ができます。申込は会場で直接職人さんに申し出てください。



更紗染の体験



実演日程表

	技術	保持者		技術	保持者
11月1日(金)	刀剣研磨	臼木良彦	11月3日(日)	建具	友國三郎
	べっ甲細工	磯貝 實		襖縁・櫓	鈴木延坦
	木彫刻	渡邊美憲		すだれ製作	豊田 勇
	庖丁製作	吉澤 操		木彫刻	岸本忠雄
	建具	友國三郎		相撲呼出し 裁着袴製作	富永 皓
	江戸指物	山田一彦		江戸指物	山田一彦
11月2日(土)	江戸切子	小林淑郎	11月4日(月・振休)	更紗染	佐野利夫
	無地染	近藤良治		更紗染	佐野勇二
	べっ甲細工	磯貝 實		あめ細工	青木 喜
	表具	岩崎 晃		刀剣研磨	臼木良彦
	手描友禅	和田宣明		紋章上絵	亀山晴男
	庖丁製作	吉澤 操		すだれ製作	豊田 勇
	更紗染	佐野利夫		木彫刻	岸本忠雄
	更紗染	佐野勇二		相撲呼出し 裁着袴製作	富永 皓
	あめ細工	青木 喜		更紗染	佐野利夫
				更紗染	佐野勇二
				あめ細工	青木 喜

※ は技の体験です。

公開時間は午前10時から午後4時まで(休憩あり)。

都合により変更する場合がありますので、ご了承ください。

深川江戸資料館 一案内図



交通

- 東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「清澄白河」駅下車 A3出口 徒歩3分
- 都営バス門33系統「清澄庭園前」下車 徒歩3分
- 都営バス秋26系統「清澄白河駅」下車 徒歩4分

◆芭蕉

柿衛文庫の名著

10月24日(木)～11月24日(日)まで

芭蕉筆「はるやこし」句短冊

松尾芭蕉が深川に移り住んだのは、延宝8年(1680)冬、37歳のときでした。芭蕉は、以降14年間、ここを文学創作の拠点に諸国を巡り、多くの紀行文を編んでいます。なかでも、『おくのほそ道』は、我が国文学史上傑出した作品として、今日まで多くのファンを魅了し続けてきました。

今回の特別展は、来年の開館30周年を前に、公益財団法人柿衛文庫(兵庫県伊丹市)の全面的な協力により開催することになりました。

柿衛文庫は、東京大学総合図書館の「洒竹・竹冷文庫」や天理大学附属天理図書館の「綿屋文庫」と並ぶ日本三大俳諧コレクションとして知られています。同文庫は、そもそも国文学者岡田利兵衛(号、柿衛)翁が学術研究資料として系統的に蒐集されたものを、同翁の遺志により昭和57年財団法人とし、同59年(1984)11月に「柿衛文庫館」として開館しました。

出品される、主な芭蕉の真跡を紹介します。

「はるやこし年や行きけむ小晦日」



の短冊は、寛文2年(1662)19歳の宗房時代のもので、これは伝存する芭蕉の作品中、最も若いときの作品と言われるものです。また、延宝9年の「我富り新年古き米五升」の短冊は、

深川芭蕉庵に居を移した翌年の正月の作品です。天和元年(1681)の「芭蕉野分たらゐに雨をきく夜哉」の句草稿は、天和期の傑出した作として知られています(元禄6年頃の染筆)。貞享末年の作成とされる批点「秋たつ日」歌仙は、芭蕉の批点が極めて少ないとされるなかのものとして貴重です。

さらに芭蕉の絵画の師とされる森川許六の芭蕉行脚像や、元禄2年



許六筆芭蕉行脚像

(1689)『おくのほそ道』の旅中の「荒海や佐渡によこたふ天河」他句草稿は、芭蕉が旅中常に備忘録(メモ帳)

を携帯したこと

を示すものとし

て興味深い資料

です。ところ

で『おくのほそ

道』は、能書家

の柏木素龍に芭

蕉が清書させま

した。これが「西

村本」ですが、

実は素龍はこの

外にもう一書を書き上げており、これ

が今回出品された柿衛本『おくのほそ

道』です。筆跡は西村本よりも優雅で、

使用した料紙や装丁はこの柿衛本のほ

うが優美であることが特徴です。

芭蕉の元禄4年の自画賛「山吹や」

句幅は、手法は狩野派で、まだ俳画に

なりきっていないものの俳趣は十分に

窺われるもので、書と画の調和は見事

な逸品です。

このほかに芭蕉書簡4点。貞享2年

(1685)3月26日の大垣の谷木因

に宛てたもので、「野ざらし紀行」の

旅は木曾路を通って帰庵する予定であ

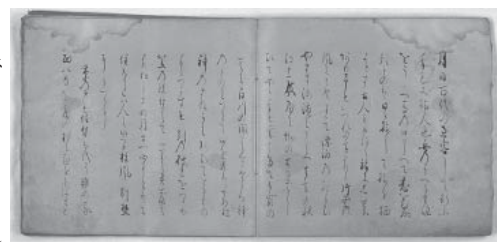
ることなど、この旅の重要な資料とさ

れています。元禄3年(1690)7

月頃とされる去来宛の書簡は、幻住庵

に滞在していた時に書かれたもの。元

禄4年11月13日の曲水宛の書簡は、『お



素龍筆柿衛本『おくのほそ道』

くのほそ道』の旅から3年ぶりに江戸に戻って間もなくの執筆ですが、この書簡は膳所出立と江戸の到着の日時を知る資料として貴重とされています。元禄5年10月25日の許六宛の書簡は、芭蕉と許六の交流を示す最初のものとして貴重です。

今回出品される資料は全19点です。この機会に是非、芭蕉真跡のすばらしさを実感され、また芭蕉の心に触れてみてはいかがでしょうか。

臨川寺所蔵芭蕉翁像

【特別公開中！平成26年5月末迄】

大正12年(1923)9月1日の関

東大震災によりそれまであった一尺

一寸の像が焼失。現在の像は一尺五

寸(約50cm)で、昭和63年(1988)

に復元された。材質は楠。仏師は奈良

柳生の由谷六九拾師。臨川寺は、承応

2年(1653)仏頂禅師の師、鹿島

根本寺住職冷山和尚が小名木川のあた

りに草庵を結んだのが発祥。正徳3年

(1713)3月6日に「臨濟宗妙心

寺派瑞甕山臨川寺」となる。芭蕉参

禅の寺として有名。

【問合せ】芭蕉記念館

江東区常盤1-6-3

☎03(3631)1448

大島地域の出村

出村とは、もともと町や村の飛び地であったところが、本村・本町から分かれて一つの村として成立したものです。大島地域には、こうした出村がいくつもあります。〈図1〉は明治11年の地図ですが、江戸時代以来の出村の分布状況をよく示しています。



図1 明治11年「実測東京府下改正区画郡区町村明細図」(『日本地図選集』人文社、1982)(部分)

中之郷出村

中之郷出村(大島1・2丁目付近)は、もとは中之郷村(墨田区)の飛び地であったものが一村に分立した村です。しかし、年貢高は中之郷の高477

石余に含まれており、出村分として165石余が内訳されています。出村の村名は小名(村内小地域)の名前に由来する荒久村の俗称で呼ばれることもありました。

中之郷出村の鎮守として祀られていたのが愛宕社(現愛宕神社、大島2-15-4、もとは大島2-16付近に所在したが大正12年に現在地へ移転)です。江戸時代初めは、本所中之郷(墨田区)の成就院境内にありましたが、元禄年間(1688-1704)に村人が住職と示談して、引き移してきたとされており、村の成り立ちを示唆しています。

南本所出村

南本所出村(大島7-9丁目付近)は、南本所村(墨田区)の飛び地です。堅川沿いに位置する小名六之橋があったことから、六之橋出村の通称がありました。中之郷出村もそうですが、これらは武家地などとして本村の土地の一部が幕府に召し上げられたため、その替え地として開発されたものです。

南本所出村にまつわる史跡には、牛島神社跡(大島9-4、区登録史跡)があります。南本所牛島神社は、もとは南本所出村の石井甚左衛門屋敷地内にあった稲荷社を、村の産土神として祀るようになり、さらに牛島神社(墨田区)の分霊を併祀して成立しました。

しかし、昭和20年3月の空襲で被災し、同25年に東大島神社(大島7-24-1)として合祀されました。史跡には「南本所牛島神社々趾」と記された石碑が建立されています。



南本所牛島神社々趾

また、牛島神社が合祀された東大島神社には、明治41年(1908)に造立された2基の鳥居(区登録有形文化財「建造物」)がありますが、これは南本所牛島神社と北本所牛島神社(大島7-37)から移されたものです。

さらに天明7年(1787)11月に石井甚左衛門ら七人により建立された庚申塔(区登録有形民俗文化財)も残されています。石井甚左衛門は、前述の南本所出村に屋敷地を持っていた人物と推定され、この庚申塔は南本所出村の関係者が造立した石造物と考えられます。おそらく南本所牛島神社が合併された際に移されたものでしょう。

様々な出村

出村各村にある神社とは別に、亀戸・大島地域全般の村々から信仰を集めたのが亀戸浅間神社です。出村の村々が

戦前の浅間神社を崇敬し、神社の復興に尽力したことが記録されている文化財が浅間神社境内に残る大正8年の修庭記碑(区登録有形文化財「歴史資料」)です。刻まれた銘文によると、浅間神社は亀戸町のほか、本所出村(南本所出村)・深川出村・北本所出村の鎮守として信仰を集め、村々が天正6年10月の暴風雨によって荒廃した神社の境内整備に努めたことがわかります。



修庭記碑

この石碑にも見られるように、大島地域には、前記の二村以外にも北本所出村、六間堀出村、深川出村など複数の出村がありました。大島地域の出村は、町場開発などのため幕府に土地を召し上げられた町や村の代替地として与えられたものが一村として成立したものです。〈図1〉にみられる土地の状況からは、本所・深川の町場開発が大島一帯の地域形成に少なからず影響を与えていたことがうかがい知れます。

(参考文献)『新編武蔵国風土記』、『東京府志料』、『大島町史』

(文化財専門員 斉藤照徳)

東京海洋大学越中島キャンパス所在の切石について

はじめに

国立大学法人東京海洋大学越中島キャンパス（越中島2-1-2）内に所在する切石について、前号で一部写真を掲載しましたが、今回は刻印など現状で分かっていることについてご紹介します。

越中島砲台について

越中島砲台は近年の研究によって、元治2年（1865）2月までには幕府調練場内に完成していたことが分かっています「建造の経緯等については、前号No.262掲載の富川武史氏（品川区立品川歴史館）の講演録をご参

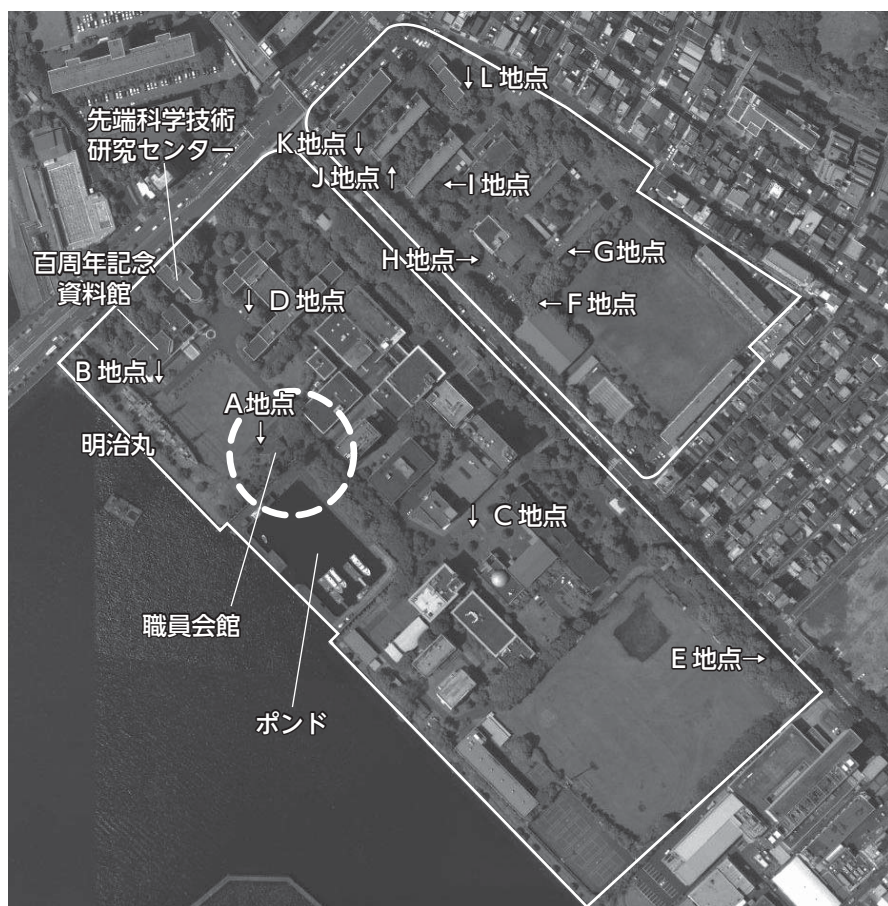


越中島砲台推定地点（北西から）

照ください」。砲台の築かれた場所は、

明治初期から30年代にかけて発行された地図から、東京海洋大学の明治丸の東辺りと推定されます。砲台の規模については、本誌No.253で掲載した、東京都立中央図書館所蔵の「越中島砲臺絵図」（平面図）で分かります。同図によると、基部の長さは三拾九間三尺（約71m）を測り、総坪数の記述はありませんが、「屯所平坪」（兵が詰めている平場）三百四十三坪三合五勺（約1135㎡）と見えます。縁辺部の注記には「石垣」と見えることから石材が用いられていたことがわかります。

砲台の廃絶年はもちろんのこといつまで形状を保っていたかについての記録はありません。明治30年代後半から40年代にかけての地図を見ると、推定地点には2つのポンド（係留池）が築かれていることが分かりますが、砲台の輪郭は確認できません。一つは明治丸を係留するためのポンドで、明治35年（1902）に、東京海洋大学の前身である商船学校が当地に移転し整備されたことによります。この整備のうち、ポンドを造成する際に砲台が全域もしくは一部が損壊を受けたと



切石状況の位置

※実線は東京海洋大学の範囲、破線の丸は砲台の推定位置

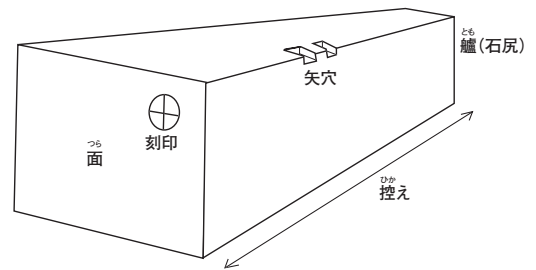
推定されます。ポンドの浚渫は明治34年（1901）12月25日に完了しています。ちなみにこの時のポンドの範囲は、東は「職員会館」の辺り、西は「百周年記念資料館」の西辺り、北は「先端科学技術研究センター」の南辺りと推定されます。ポンドは、大正9年（1920）、昭和10年（1935）と徐々に埋め立てられ、昭和38年（1963）には地下鉄東西線の掘削

残土によって完全に埋め立てられました（『明治丸史』東京商船大学、昭和57年）。もう一つは、東に隣接する水産講習所時代に造られたポンド（右図注記）で、明治35年までには完成されていたようで、現在まで存続しています。

切石について

平成22年、「越中島砲台跡」を江東区の史跡として登録する際に、砲台跡推定地点である職員会館付近（図1A

	地点	個体数	刻印内訳
A	職員会館 西	7	
B	百周年記念資料館 南東	2	
C	越中島会館 西	4	
D	1号館 西	3	
E	グラウンド 北東	102	二 (11) / 上 (10) / ▮ (3) / △ (2) / + (2) / ⊕ (1) / ㄣ (1) / ㄣ (1) / ㄣ (1) ※ 29 個体 9 種 32 カ所
F	体育館 北西	1	
G	八十五周年記念会館 南東	3	△ (1)
H	八十五周年記念会館 南西	4	▽ (1)
I	第2・5 寮間	3	ㄣ (1)
J	第1・2 寮間	3	ㄣ (1)
K	第1 寮 南西	2	二 (1)
L	国際交流会館 東	3	ㄣ (1)
	総計	137	35 個体 10 種 38 カ所



刻印のある切石 (E地点)

地点)に7個体、同北西の明治丸前(図1B地点)に2個体の切石が確認されました。平成24年10月には、東京海洋大学関係者のご教示を得て、筆者が富川氏とともに大学構内を調査したところ、新たに7個体(図1C・D地点)が、その後の調査でも121個体(図1E・L地点)が確認され、計137個体の切石が存在していることが分かりました。

切石のほとんどは四角錐もしくはこれに近い形を呈しています。切石の規格は、4個体(控え180〜225cm、面部幅83〜111cm)以外は、控え90〜135cm、面部幅50〜84cm、面部高さ28〜38cmを測ります。中には刻印や矢を打ち込んで石を割るための矢



刻印(拓本)

穴が認められます。刻印は、A・Lの12地点のうち、E・G・Lの7地点35個体の切石に10種38カ所が確認できました(表参照)。なお、一つの切石に刻印が2カ所、3カ所確認できるものが一個体ずつあります。この刻印は石工集団が作業工程で付けたものと考えられますが、刻印それぞれの意味は不明です。

現状では石材鑑定をしていないのですが、肉眼で観察した限り、ほとんどは西相模から伊豆半島にかけて産出される安山岩と推定されます。この切石群についての来歴は伝わっていませんが、前述のとおり、砲台推定地点に該当するポンドの浚渫時に、これらの切石が引き揚げられたのかもしれませんが。

昭和51年発行の『東京商船大学百年史』に掲載の航空写真にはA・B地点の切石は確認できませんが、L・G地点は場所がやや違うものの切石と思われる物体が写り込んでいます。このため、昭和51年以降の学内整備で現状の配置となったと推定されます。

余談となりますが、今回の東京海洋大学越中島キャンパスでの確認と同時期に、品川キャンパス(港区港南4丁目)でも多くの切石が確認されています(平成24年12月、富川氏が主体の確認調査に筆者も同行させていただきました)。刻印は越中島キャンパスと同一のものが認められ、また、肉眼観察ですが石材のほとんどが越中島キャンパスと同じ安山岩と推定されます。品川キャンパスの南には越中島砲台と同時期に同じ請負者によって築造された第四台場(工事途中のため未完成)がすぐ南にあることから、一つの説として第四台場の石垣の構築材である可能性を富川氏が指摘されています。

おわりに

今後、越中島キャンパスの切石について計測などの調査を実施する予定で、詳細は今年度末刊行予定の『江東区文化財研究紀要』第18号にてご報告する予定です。

企画展「江戸の三大改革と松平定信」

平成25年10月29日(火)～平成26年10月

特別展「松平定信の生涯とその作品」

平成25年11月16日(土)～12月1日(日)

深川江戸資料館では、平成25年度企画展で当資料館隣の霊巖寺にねむる松平定信(1758～1829)の生きた時代の政治と社会、特別展で幕府老中を勤めた松平定信の人となりや引退後の文化活動を紹介し、定信とその時代を見ていきます。

(1) 松平定信の生い立ち

松平定信は、御三卿のひとつ田安家の初代宗武(8代將軍吉宗の二男)の7番目の子として生まれ、幼名を賢丸まさまるといいました。17歳の時、陸奥国白河藩の松平定邦の養子になり、19歳で養父の娘・峯姫と結婚すると、藩政の舞台に登場します。その後、天明の飢饉で領地に餓死者を出さなかつた政治手腕が買われ、老中に抜擢されました。



松平定信肖像(福島県立博物館蔵)

(2) 老中首座、將軍補佐として

老中首座になった天明7年(1787)俚約令を発し、寛政の改革がつぎつぎと実施されます。寛政元年(1789)には棄捐令、囲初、翌2年には石川島

人足寄場の設置、異学の禁、旧里帰農令、翌3年には江戸町法の改正によって七分積金の制を発足させました。白河では、藩士子弟の学問所「立教館」を竣工し、その運営に力を入れます。

一方海防の面では、寛政4年(1792)ロシア使節ラクスマンが根室に來航し、内憂外患は顕著なものとなります。

(3) 老中辞任と庭づくり

寛政5年(1793)に老中を辞任すると、定信は藩政に力を注ぎます。小峰城には、庭園「三郭四園」を完成させ、90歳以上の農・商を招いて敬老会に当たる尚齒会などを催しました。

また、享和元年(1801)に白河に完成させた「南湖」は、誰もが共に楽しめる園地としました。

(4) 定信の致仕と浴恩園

定信は文化9年(1812)数え55歳で隠居します。上屋敷から築地の下

屋敷に移ると、ここでも「浴恩園」を作庭し、文化活動を展開します。文化13年には、深川にも庭を造り深川松月齋と称しました。遅咲きの桜を植え、

シーズンの最後の観桜を楽しんだと伝えられて

います。

(5) 定信と深川

霊巖寺にねむり、その地は江東区白河の地名がつけられるという、深川と深い縁を感じる定信ですが、生前の定信が深川という土地に寄せた思いを知ることはできません。しかし、作品や文化活動の中に、深川の風土や情景が及ぼした影響は小さくなかつたであろうことは、72年の生涯の最後の作品が深川松月齋の作庭であつたことから推測することは可能でしょう。

(6) 特別展の主な展示資料

今回の特別展では、定信が筆写して嫁ぐ娘に持たせた『徒然草』(東京都公文書館蔵)、その信仰の一端をうかがい知ることのできる自筆『阿弥陀經』(桑名市博物館蔵)、茶道に親しんだ定信愛用の茶釜・茶杓(同)などを実物でご覧いただきます。また、白河



深川入船町御邸松月齋(国立国会図書館蔵)

の特産物「白河だるま」を考案した定信の「達磨図」をはじめ迫力ある絵画作品約10点を写真パネルでご覧いただきます。これら作品や遺品を通じ、禁欲的な改革の推進者というイメージばかりが強い定信の違った面や、人となりを身近に感じていただければ幸いです。

なお、11月29日18時30分より、東京都江戸東京博物館長・竹内誠氏の講演会「寛政の改革と松平定信」も開催します。東京で初公開となる定信の作品と出会う深川江戸資料館へ、ぜひおいでください。

【問合せ】深川江戸資料館

江東区白河1-3-28
☎03(3630)8625

計報

江東区指定無形文化財(工芸技術)「ガラス工(江戸切子)」保持者須田富雄氏は、平成25年8月1日にご逝去されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

お詫びと訂正

前号(262号)掲載の「江戸の町内探訪⑥ 越中島町」(5頁3段目6行目)と記念講演録(6頁2段目6行目)の西暦に誤りがありました。正しくは5頁が「享保15年(1730)」、6頁が「文久2年(1862)」となります。お詫びして、訂正いたします。